
悪魔のゲーム

月夜輝石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔のゲーム

【Nコード】

N5866J

【作者名】

月夜輝石

【あらすじ】

「生きてた証を残したいの」とある少女の小さな願い。その少女、瑞希が証を残す為に行うゲームはあまりにも危険で…。

死と隣り合わせの命のゲーム。今、ここに――…

橘 瑞希

『これから危険度最大のゲームを行ないます』
はじまった・・・

僕のお気に入りのゲームがね

「ここがゲーム会場か・・・」
大きな建物。教会のようで教会ではない
一人の男の子が、その前に立っている

ここに来れば俺は楽に…幸せに暮らせるって
とじろぎ
鷲木さんが言ってた
俺はここで本当に幸せになれるのか？

覚悟を決め建物に入って行く
中はいかにも普通で、受付が真ん前にある

「あ、あの、俺ゲームを行ないたいんですけど、どうすれー」
「ダメです」

まだ途中しか言っていないのに、いきなりは酷くない!?

「え、いや俺、麿木さんがここに来ればって・・・」

「では証明書を見せてください」

なに証明書ってなに?

「なければ許可証をお見せください」

ブチッ

「だから俺はここに来てって言われたの!」

「ですから許可証を見せてください。でなければ参加はさせません」
話の解らない人だなー

俺と受付のお姉さんは言い合いを始めた。幸い周りには人がいない

「マツキー!」

マツキー?

もしかしてこいつの事?

茶色の帽子をかぶった子が走ってくる。

男?

「瑞希さん。どうぞお通りください」

「なんでこいつはいいんだよ!」

「だってメンバーだもん」

瑞希と呼ばれた少年はカードを取り出した。

そこには、はっきりと

『

————メンバー

橘 瑞希

53戦53勝

』

・・・これが許可証？証明書？
てか、全戦勝ちってすごくない？

「君はなんでここにいの？」

「俺は麤木さんがここに来て」

「麤木さんからそう言われたの？ホントに？」

「ホントだよ」

どいつもこいつも、俺の話信じろよ

「マッキーこの子通していいよ」

「いえダメです」

少年は意地悪そうに微笑んだ

こ、怖い！！！！

「いいの？マッキー？もし本当のことだったら麤木さんマッキーの
事、くびにしちゃうかも」

「・・・どうぞお通りください」

負けてる。てか、負けた。

「では瑞希さんが面倒をしてください」

「はい」

少年は俺の手を強引に取り奥へと走っていく。

こいつ強引だなー

「みんなー注目!!」

なんだ、ここ誰かの自宅？

ソファーあるし

アイス食べながら漫画読んでる奴がいるし

「なんだ今回は普通の登場か？」

何こいつ、いつもはどんな登場してんだよ。

「さすがの僕もネタ切れだよ」

「やーかわいいー」

「ぐふ」

後ろからの不意打ち。

抱きしめてるようだが、首を絞められてる。

苦しい・・・死ぬ

「あー柚子ねえーダメー」

慌てて後ろの女の人が離れた

あー苦しかった。

えっと・・・だれだっけ？

名前は覚えだせないが、

「ありがとう」

「おっ新人か？名前は」

でかい人・・・。大人かな？

「そう言えば、僕も聞いてないな」

うわーなんか見てるし。目立つの嫌いなんだよなー
視線が痛い

「俺は高桜 たかおう 大智 だいち 13歳の中二」
そろそろ誕生日だけど

「私は春崎 柚子。柚子ねえってよんでね。こう言う子待ってたのよー」

さっきの女、柚子っていうんだ

「俺は望月 北斗。北斗って呼べ！大智！」

「はい」

なんか怖そうな人だけど、違うなー。印象とね

「で、僕が12歳の橘 みずー」

年下なんだ。まあ俺よりチビだし当たり前だよな

「ほくとおー」

なんか自己紹介かき消してるし。

更に上から誰か降ってきたし。あっ橘何とかの上に乗ったし
帽子落ちたし

「健。重い」

「あーチビで見えなかった」

へー意外と髪長いんだなー

腰までスラリと長い黒髪は女みたいだった

「もう健ちゃん。どきなさいよ、レディーの上に乗るなんて非常識よ」

・・・ん、レディー？

・・・

・・・・・・女？

「えーーーーー。おま、お前女？」

橘何とかは、むすっとした顔で、

「今さら？僕は女だよ。正真正銘の女だ」

・・・まじで！？

「ほら」といつてさっきの証明書と見せた。

そこにははっきり『女性』と書いてた

ついでに名前も、瑞希かー

「・・・本当だ」

「どうせ僕は男みたいですょ」
すみません。

本当に心から謝ります。

だから、そんな隅に行かないでください。

「まあゲームのためだろ。」

「早く行けよ」

どこに？

「お前は行ってほしただけだろ。このくそ！」

女の子がそんな事いってはいけません。。

「ほらー瑞希女の子が『くそ』なんて言っちゃいけません」
ごもっとも

「ははは。後10分でゲームオーバーだぞ」
少しながらの沈黙。

「あー」

急いで更衣室に入った

・・・なんで更衣室？

「あの：なんで更衣室？」

「正式衣装に着替ええないといけないのよ。可愛いわよ」
可愛い？

どんな服だよ

「あつ大智あれとって」

「これ？」

ソファーの下にある、本を頑張って取ると、取れない

「北斗！邪魔！！」

「はいはい」

なんか瑞希の声した時に・・・取れたー
なんか快感

「健。はい」

「あっもういらない」

死ね

人が頑張ったのに

「大智来なさい」

「？は、はい」

どこ行くんだ？

「あのどこ行くの？」

「瑞希の所。今は審査中だったと思うわ
審査？」

そういえば俺『ゲーム』が何か分からない

「柚子ねえ。ゲームってそもそも何？」
ん？

柚子ねえ？

なんで止まるの？

「キングから聞いたほうがいいよ。私からは言えないわ」
キング？

なんだキングって。王様？

「ほら瑞希よ」

ガラスの斜め下に正装した瑞希がいた。
あれが正装？

男が着るもんみたい

「佐藤 夏美は澤^{さわ}嶋 悠の告白を受けた？ 瑞希答えろ」
なんだこの問題。

人の告白を問題にしてるのか？
・・・ないよな作り話だよな

「夏美さんは告白を断った」

瑞希はいった

「いや悠の告白を受けた」

「分かれましたね。結果発表。この映像を見てもらう」

辺り一面が暗くなる

なんの映像が流れるんだ

『悠君！』

『佐藤さん・・・あの告白の返事だけど：聞かせてくれる？』

『ごめんなさい。悠君とは付き合えないわ』

映像が夏美さんの言葉で終わり、辺りは明るくなった

「正解は告白を断った。勝者は橘 瑞希。敗者は勝者にポイントを
全て渡せ」

ポイント？

「うわぁーーーーーいやだ。いやだ負けなんて俺は認めない」
敗者が泣き叫ぶ。

ポイントってそんなに大切なのか？

瑞希は敗者の元にいき思いつき押し、敗者の男は倒れた。

これが瑞希？

さっきと全然ちがう

「瑞希？」

「敗者の貴方は勝者の僕に全てのポイントを渡すのがルール。それがいやなら……」

瑞希はチラッと司会者を見た

司会者は分かったように笑った

「敗者が渡さないのなら、勝者に50万です」
金？

50万って高価格な金額だぞ

「やめてくれ。全部渡すから」

「初めからそうしろ、負け犬。僕に逆らえない存在が」

「ううっ」

「なんだこのゲームって……敗者は勝者に絶対服従なのか？」

「……この残酷なゲームは時に人権も取ることができる。生きか

死が決まる悪魔のゲームよ」

柚子ねえもだ。さっきまで優しそうだったのに

真剣そのものだった。

「悪魔のゲーム」

これが俺がやるゲームなのか？

人の人権まで取ることのできる、

死と隣り合わせの

悪魔のゲーム

家族

「あー疲れたー北斗アイスちょうだい」

「今日はチョコ味だぞ」

「わーい」

・・・さっきまであんな顔してたのに
跡形もない

「はい大智の分」

「あ、ありがとう」

瑞希からチョコ味のアイスを貰い
少し戸惑う

「あのさ。ゲームってそもそもなんなの？」

「「「え？」」」

・・・え？

って俺が言いたいよ。
柚子ねえないし。

「えっとな・・・おい目立たないプリンセス」
うわーギコチない言い方
なんかさっきも柚子ねえ言ってたなー
キングって言ってたけど

「えーやだー。北斗やってよー」

もしかして瑞希が？

「ははは。俺は説明が下手だからな。拓真がいればな」

「拓真？」

「あつ拓真っていうのは、クールでチョーカッコイイんだよ。あつ噂をすれば・・・」

三人の姿勢が扉の方に向く

俺もついでにみんなが見ている扉に目を向ける

・・・濡れてる

なんで？

「……濡れた。健、タオル」

「えー俺？ほら」

その辺にあったタオルを適当に渡す。

なんでここにタオルが？

その前になんで濡れてんの？

「・・・新人？珍しい…俺の証明書だ」
カード

「ありがとう」

そう言ってカードを投げてきた

乱暴だなー

えーと

『

宮下 拓真 たくま

31戦31勝———

』

こいつも全勝かよ。

もしかしてここにいるやつみんな全勝してる

・・・とか？

「おまえ名前は？」

「俺は高桜 大智。中2の13歳」

「13歳！？ホントに13なのかお前？俺と同じぐらいの身長じゃん」

なんか違う奴が食いついた
ってか、今お前が段差に乗ってるからだよ

「ああ、瑞希次よろしく：」

「拓真、大智にゲームについて教えて上げろよ。説明うまいだろ」

「・・・ゲームって言うのは、いろいろな人からの依頼や行動についてプレイヤーと勝負する事だ。10000ポイントを早く集めた人は何でも願いを叶えてもらうことが出来る。まあ負ければ死んだも同然の遊び」

・・・危ないゲームじゃなか！！

「そういえば・・・大智。登録したのか？」

「？なんの」

「「ゲームの」」

このゲームって登録必要なんだ

「まだだよ。連れてってないもん」

うん。俺も連れてってもらった記憶がない

「じゃあ今すぐ行こー」

また強引に手を引っ張る。これさっきもやったよね・・・確か

「……ここは？」

たくさんに並んだ椅子は大きな十字架に向き、結婚式で使われる教会のようだった。

高い天井の窓から注す光は優しい光で、部屋の装飾の風味を更に引き出していた。

「キングがいる所。無礼の無いようにね」

「うん」

どんな奴なんだ？

キングって

『久しぶりのプレイヤーだ。そなたの名を申せ』

十字架のあたりから不思議な声がする。

男なのか女なのかも分からない…不思議な声…

「俺は…高桜大智」

『良い名だな。瑞希少し席を外せ』

「はい。終わり次第お呼びください。それでは失礼します」
瑞希は一礼して、扉の奥に消えた

『そなたは何故ここへ来たのだ？』

「轟さんがここに来れば幸せになれるって……」

『また轟か…良いだろう。そなたの願いを申せ』

「家族ともう一度幸せに暮らしたいです。それが俺の願いです」

『家族か…確か瑞希も家族は居なかったな……』

「え？」

今なんて？

瑞希の家族ってもういないのか？

『瑞希は9歳の時家族が皆火事で死んだ。キセキ的に生きた兄妹の兄は行方不明』

9歳で…皆死んだ？

それから独りぼっちだったのか？

俺は10だったし、叔母さんが俺を養子として引き取ってくれて、
苦しくても安心できた

『あの子はずっとここでゲームをやった。願いを叶える為に命を懸けて……』

ねえ、

あんたは命を懸けてまで

何を願ったの？

約束

ねえ…

あなたは覚えてるかな？

僕たち兄妹が約束した事。

【生きて…絶対生きて…また会おう…】

って約束した事を。

僕は、ちゃんと覚えてるよ。

火の中で最後に聞いた言葉だったから

忘れるわけ、ないもんね。

でも今は…

今は…

違う人達と居て…

きつと

あなたも

新しい人達と

一緒に居るのかな…？

僕のことを忘れてるのかな？

それでも、僕は

いつか絶対

あなたに会いに行くよ。

会ってまた一緒に暮らすんだ

—あなた（お兄ちゃん）に——…

命と願い

「キング様お入りしてもよろしいでしょうか？」

『ああ入って良いぞ。今から儀式を始める』

「では、失礼します」

ガチャという音と共に入ってきたのは瑞希と健だった。なんで健？
いつの間に？

「はあ…そろそろ姿を見せたらどうなんです？キング」

「瑞希の仰る通りだと思います」

おおーあの頑固な健が敬語を使うなんて…それほどすごい人なのか、やっぱり！

『えーだってイメージが違うとか言われるし』

…はい？

今キングの声からタメ口が聞こえたような…

「キング！貴方は仮にもこの頂点の方ですよ！？言葉を慎んでください！」

『…申し訳なかった』

あつただの空耳かあ

まあ当たり前だよな。さっきまであつく語ってくれた人がタメなんて、ねえ。ありえないからぜったいに！

『仕方がないな…出て来てやろう』

「ありがとうございます」

おお出て来るのか！一体どんな人かな♪

期待に胸をふくらませて待っていると、出てきたのは…男の人？でもこの人見たことある様な…

あっ覚えだした。司会をしてた人だ！きっと、いや多分。

「あー面倒だな」

「キング！」

「ゴホン。ではこれから儀式を始めよう」

「はい」

もしかして、キングって物凄く面倒くさがり？…とか

そう思っている内にキングは目の前に来ていた。随分早いんだな

「あゝーめんどくせえ」

誰も聞き取れないような小声で→の言葉が聞こえたような…しかし、瑞希は聞き逃さなかった。

「キ・ン・グ・？」

瑞希の顔はスマイル&怒りが混じっているような顔だった。マジで怖いです。。

「…では儀式を始めよう」

「今神と誓い、己の身を捧げることを誓うか？」

「…」

今ここで「はい」と言ったら後戻りは出来ないかもしれない：死ぬかもしれない。大金を払わなければいけないこともあるかも知れない。でも、俺はやらなければならぬ

「誓います。この命に替えても」

死んでも構わない。

でもその前に一度でも良いから幸せな生活を送らせてほしい。俺の願いのだから

部屋一杯に広がったこの言葉は、俺の人生は大きく変えていった――

――…

命と願い（後書き）

やっと更新しました。

遅いくせに短いですね…第四部。

学校（前書き）

久々の更新です！

- ・キャラ壊れてるかもしれない
- ・なんか話がよくわかんない
- ・途中でなにかが変わっている

ということが恐らくございますので、あらかじめご注意を：

学校

おはようございます。朝です。学校です。
今、見てはいけないものがあるような気がします。

目の前には大きい建物。ビジネス関係の仕事場として使っているような豪華な校舎。広すぎて端から端まで歩いて行くのに五分ほどかかりそうな校庭。思わず「ここ学校ですか？」と聞きたくなる。だが、校庭を通っている生徒たちは校舎に見向きもせず普通に入っていく。

なぜ、ここに一般人の俺が居るかというと：

昨日の夜、面倒くさがりのキングが「学校辞めてきた？じゃあここに適当に通えば？」という感じに、この学校に行けといわれて来て見たらこの有様だよ。

校門の前で呆然と立ち尽くしていると後ろから足音が：
それも走っているような速い音。

「おっはよー大智！」

「ぐふッ。」

後ろからの不意打ち。

首辺りに誰かの手がある。一見誰だかわからないような気がするが、前にもあったパターンで誰だかはだいたい検討はついている。

「ゆず…さん？」

「正解！」

大智から離れ、人差し指を立て軽く微笑む。

「おはようございます」

「おはよう大七」柚子様 ああああああああああ

挨拶を少々遅れたためしただが、柚子さんに襲い掛かる女子生徒の声でかき消されてしまった。
これは一体何事でしょうか？

「おっはよ！」

今度は肩がじんじんするほど強い力で叩きながら、元気よく挨拶をしてくれる。声の高さで瑞希だとすぐにわかる。
で、皆で俺を殺す気ですか？ だったら他の方でやっていただきたい。実際いけないことだけだ。

「お、おはよう：瑞希。あのさ、一つ聞いていいっすか？」

「検討はついてるけど、聞いてあげるよ」

「この朝からの騒ぎは何？」

校庭でさっきまで無かったはずの生徒たちの団体が至る所に出来ている。しかも生徒たちは少しずつ離れているところに群がっている。その中心には柚子さんが居たり、拓真がいたり、健がいたり：している。あのゲームに参加している人達が中心として。

「まあ：「きゃあああ！」とか「拓真様あ！」とか騒いでる人たち？
要するにファン？」

瑞希が騒ぐ女子の声を察知しているのか、それとも偶然なのか、瑞

希が言葉を止めたときに歓声が入りながら話す。

「ファンとかいんのかよ!？」

俺初めて学校でファンがいんの見たんですけど?! しかも生徒のファンってなおさらなんですけどお?! とうかこの学校しかないとおもうんですけどお?!

「ということで、大智。見つからないうちにさっさと行くよ」

「はッ? 俺ファンとか居ないから」

転校してきてすぐにファンをつくるほど、俺は人気者じゃないし、顔もごくごく普通です。

「違う違う。大智のファンなんかできないから。僕のファンだって」
「失礼だろッ。俺だってな、ファンの一人や二人、居るんだからなッ!」

「ウソだああ! 絶対にウソだって!」

大声で全力に拒絶する。ちょっと、かなり失礼じゃないですかあ! ? 総理大臣にやったら即死刑ですよ? 恐らく…

「瑞希様よ! 瑞希様が来たわ」

近くに居た女子生徒が気づいたのか声を張り上げる。……もしかして

「だから静かにしてって言ったじゃん、大智!」

「お前がやったんだろ。自業自得だよ!」

押し寄せてくる生徒に抱くものは誰であっても恐怖心だろう。その

恐怖心に負けたのか、なぜか大智まで逃げる。逃げればいいのは瑞希だけのはずなのに：

転入初日。

朝からめんどくさいことに巻き込まれました。これから俺はこの学校でどうしろと？

なんかこの学校異常なんですけど？

学校（後書き）

なんか…頑張った？
のかな？

迷い子（前書き）

初☆一月投稿

初めて一月に2回投稿しました☆

迷い子

朝から知らない校舎を通って…

見慣れない廊下を走って…

俺はどこに行くの？

「疲れた…」

押し寄せる生徒になぜか俺までもが逃げてしまい。そのあげく、瑞希と一緒に逃げてしまった。

「というかなんで俺ここにいんだよ。まずここどこだよ…」

何故ここにいるかは知っているが口から出てしまう。

「見てわかんないの？ 生徒会議室に決まってるって」

「決まってねえよ！ ていうか入っていいのかよ！」

仮にも、生徒の頂点に立つ生徒会室に勝手に入って言い訳がない。しかも、今日転入してきたばかりで尚更いけないと思う。

「大丈夫だって…見つからない場所に来ただけじゃん。それに…」

瑞希が最後に何かを言ったが、そのとき丁度鳴り響いた鐘の音でかき消されてしまった。

「なあ、朝会みたいのこの学校あんだよな」

めんどくさがりのキングが確かに言っていたことは「校長には言つとくから、明日の朝会にでも出て来いッ」だったような…。やっとまともなこと言ったなって思ってたから間違いは無いはず。

「大智だけ行っていていいよ。僕は後から行くから」

「いいのかよ?!」

「一人生徒が消えても問題ないって。……恐らく」

「恐らくかよ!」

瑞希のいい加減差に呆れ、さっさと生徒会室に出る。

が、これがいけなかったのか校内で迷子寸前。マジでここどこデスカ?

「お前なんでここにいんだ?」

「はい?」

後ろからかけられた声に気の抜けた声で答えてしまう。

「ほ、北斗じゃん! えっなんで?」

「俺、ここの生徒。お前こそなにやってんだよ。会始まってんぞ」

じゃああんたはなんで今もここにいますか? 生徒ならさっさと会に参加しろよ。

「道に迷った。北斗案内して」

「……ここは道なのか？」

そういいながらも素直にどこかへ向かって案内してくれている。どうも、『道』と言ったのが気に入らなかったのか、小声でさりとら言っていた。仕方ないな…

「じゃあ校内で迷った。さっさとつれてけ」

「……なんか口悪くなったか？」

……

……

まだ終わらないのかな？ 校長の話。つまんなくせにダラダラ話して…

今は体育館舞台裏。なんか絶対に高校生だろと思われる北斗にここまで案内してもらった。ここは中高一貫学校なんですか？

「――では、皆さんが知っての通りの通りの転校生が来ます」

やっど？

「この学校では伝統として……――」

じゃないようだね。

「毎回のように……――」

…そういえば最後に北斗が言ってたな。「校長の話はマジで長いから30分遅れてもいい」って。言うこと聞いとけばよかったなあ。なんか付き添いの先生飽きて、漫画読んでるし。

「昨日の晩御飯は…――」

…なんで今？

「あのさ先生まだ校長の話終わんないの？」

「…ね。そろそろ生徒会が止めに来るんだけど…」

生徒会がやっちゃっていいんですか？ アレ校長ですよ？ 偉い人ですよ？

「明日は――」「これより、生徒会会長の話に入ります！」

マジで止めちゃってんですけど？！

「橘会長お願いします」

橘？

もしかして…？

幕から少し顔を出して見ると、

「本日は転校生が来てるので、紹介しちやいます。高桜くーん、どーぞ」

Σてきとーだな、瑞希！

失敗と成功

なんでマジで瑞希がマイク取ってんの？

えッまさかアレですか？ まさかの生徒会会長？

「ほらね。会長が止めたでしょ」

「ちょ、先生あれって橘瑞希でしょ？！ ゲームに参加してる。というか1年だろ！」

ゲームに参加していると言えばキングの瑞希だと分かるはず。……あれ？キングだっけ？あッ、王女か。

「ゲーム？ 橘さんは大会には参加してないわよ」

「大会じゃなくて、えーと、『悪魔のゲーム』に！」

死と隣り合わせのゲームはそんなかわいい『大会』ではないと思う。自分の中ではの話で、実際はどうなのかはわからない。簡単に説明知るとその、なんか、えーと……ワカリマセン。

「そんな大会があるのね。そろそろでちやいなさい♪」

「だから違ッ、ちようおあッ」

反論しようとしたのに微笑みながらそこにいた先生が舞台に突き出す。さっさとこの場から出て行きたかっただけのか、それとも面倒なのかは分からないが、振り向いた時にはすでに誰も居なかった。これは完璧に後者だな。うん。

「はい登場。コレが高桜ね」

「物かよ、俺は！」

つつこみながら立ち上がると舞台の下に居る人たちの視線が突き刺さる。しかも小声ながら何かが聞こえてくる。ばっちり聞こえてますからね。

「自己紹介も済んだので、これから高桜君にはあるゲームをやってもらいます」

ゲーム。その言葉で反応してしまう。あるゲームって？ 今ここで？ どうして？ そんな愚問が頭の中で巡り行き着いた答えが

「悪魔の、ゲーム…」

このゲームしか頭に過らなかった。この場でやるの？ やったことのないゲームだよ。命にもかかわるんだろ？ 覚悟を決め、瑞希が口を開けるのを待つ。そして、口を開いた。

「高桜君にやってもらいゲームは…テーブルクロス引きですッ」
「……え？」

そんな、そんな簡単なものでいいのだろうか？ そんなことを考えていると、どこからかそれに使う道具が出てきた。マジでどこからだろうね。

「ルールは恐ろしいほど簡単です。テーブルクロスを引くだけ」

ホント恐ろしいほど簡単ですね。はい。そんなの一発で出来る……と思う。実際一度もやったことがないし、やる機会がまずないと思う。だが、これなら命に関わりはなさそうだ。

「ただし。グラスに入ってる水はただの水じゃないんです。この水は名前は覚えてないけど、体が溶ける水です。もし、コレが失敗して零したら前の方々死んじゃうよ♪」

命に関わり、ない？ これはやはり悪魔のゲームなのだろうか？
体が溶ける液体が入っているということは。

「さあ、高桜大智君。早く引いてください。やらなければ入学は認められません」

「認められない？ だって俺は校長にも許可は取ってある」

昨日確かにキングと一緒に校長室に出向いた。そのときに校長は確かに認めてくれた。

「『あれを全校生徒の前でやっていただければ』って言ってたよね？」

そのセリフは…
校長室の扉を閉めるとき言っていた、と思う。あれとは悪魔のゲーム、のこと…？

「あのゲームって…悪魔のゲームってこれなのか？」

その一言で生徒たちは騒ぎ始める。先ほどまで強張った顔をしていた生徒も、泣きそうにこちらを見ていた生徒も、「悪魔のゲームって何？」と言っていた。

この、悪魔のゲームは…知られていない？

「早く引いてください！ 時間が無いんですからっ！」

これをやらないと、入学は出来ない。学校に通えない。ゲームが出来ない。願いが叶わない。幸せが手に入らない。でも、これを失敗すれば多くの人が犠牲になるかもしれない。自分の一部が消えるかも知れない。無くなるかもしれない。

そつと布に手を掛け、平らに伸ばす。

「…いきます」

そして彼はいつの間にか静まり返ったこの部屋で、運命を引いた――

失敗なんて許されない

私達が許さないのだから

成功だけを求めてる

私達が求めなくてはいけ

ないから

生きるためには何が必要？

失敗と成功（後書き）

うぐはッ

や、ヤバイ…

今回は書いてた自分でも「Σイメージマジちげえよっ！」って言い
たくなるぐらい…

最後のベタすぎだろー（怒り

※実際サブタイトルに迷ってしまったので入れただけです。

初依頼（前書き）

後半セリフばっかです。

さーせんorz

なんか調子悪くなってねえ…

初依頼

「いや、今日は凄かったね」

「笑い事じゃないんですけど…」

今ここは学校ではなく、俺が始めてきたときにいるあの部屋にいる。相変わらず、皆がのんびりと過ごしている。これでいいのか？

「まあ、よく出来たんじゃん？」

「素直に言えよ…健」

「うっせえよ！」

「ま、入学おめでと」

ソファアに座ってジュースを飲み干す瑞希の姿に先ほどのことを思い出す。先ほどとは、教室での出来事だった。

中2の俺と、中1の瑞希とは120%クラスが違うはずなのに、一番後ろの席に彼女はなぜかいた。

それだけならまだしも、指定された席は瑞希の隣。それだけでもイライラしてしまうが、瑞希がかけた言葉は、『大智は飛び級無しなんだ』。

あはは。飛び級だって？ 出来るわけねえだろうが！

「あゝムカつく。大体なんで全校生徒の前で紹介されないといけないわけ？ 小学生かよ」

「いや、これ伝統だから。校長言ってたじゃん。……多分」

この際かすかに聞こえた曖昧な言葉はスルーで。

「それより瑞希…髪染めた？」

前は真っ黒の長い髪だったのに今は、くるみ色のような色。茶髪ではいいすぎていて、くるみ色でもしっとり来ないため、この際ただの茶色と言おう。

髪の色だけじゃなく、長さまでが変わっている。腰辺りまであった長い髪が、肩につくかつかないかぐらいまで、バツサリ。

「染めてないよ。これ地毛」

「前まで、黒だったよな？ 日本人の特徴の真っ黒だったよな?!」

「なんで逆ギレしてんの、コレ」

「ここらこら！ 人を『コレ』とか言うんじゃないッ」

「あれは……かつら？」

スルーですか。しかもなんで疑問式…。突っ込みたい気持ちを抑えて、笑顔で対応する。

「ほら、いろいろ依頼で使ったりするんだよ、ね？」

「たまに女装とかあったな、確か…」

うわ…

その依頼やりたくない…

依頼とはゲームと同じらしい。依頼⇨ゲームということで、どちらを使っても同じ意味らしい。関係ないけど…

「大智…初の依頼来てるぞ」

「学校で一つ負えた気がするんですけどー」

今もらったのが初依頼だとすると、学校でやったゲームは何なんで

すかー？ 俺、超頑張ったんですけどッ！

「依頼内容。『落とされて来い』」

「……………穴に？」

「女に」

「意味わかんないんですけどー！！ 内容も可笑しいだろ！ 普通『落として来い』じゃねーの？！」

「『説明。お嬢様が外見だけで男を落としたいそうです。しかし周りは全く持って落ちてはくれないため、フリでいいので落とされて来て下さい。でないとお嬢様の機嫌が可笑しくなるのです。』だって」

「頭怒れてんじゃない！」

ようするに誰でもいいから一目惚れさせたいということらしい。頭可笑いんじゃないですか？

「大智にピッタリだねっ！」

「なにがピッタリなんですか？ そこれ爆笑してる瑞希さん、教えてくださいよ…」

「昔劇団入ってたんでしょ？ 芝居上手い訳じゃん」

「誰に聞いた、その情報！」

「轟に」

このヤロー。プライベート損害じゃねえか！

「妨害ね、大智君」

「そうそう妨害、妨害。…………俺言ってますんよね？」

「うん。逝って…じゃなかった言ってるないよ」

「確実にわざと間違えただろ！」

「『依頼人、お嬢様の使用人』だってさ」

「聞いてます、皆さん？」

ここはどうやら人をイライラさせる達人が集まっているらしい。
失礼な人が。+

能力（前書き）

やっぱり更新しました。

次回は紹介文（？）を書きたいと思います（笑い

もちろんキャラですよ

能力

「ここか…」

黒く大きな扉。尋常じゃない庭の広さと屋敷。和風とは程遠い洋風に近い模様をした門。

「……お嬢様らしいから当然だよな？」

「そうそう、このくらい普通だよ」

「だよなー。お嬢様だしなー」

「一般の人でも手にはいるでしょ」

……………

俺今誰と話してんの？ 回らない首を声のするほうに頑張って向ける。

「ハロー☆」

「お前かよー!!」

瑞希でした。

マジでなんでいんの？ 今回のゲーム男性限定だよな？

「それはな、彼女がいたやつから奪ったほうがお嬢様も嬉しくなるからだ」

「なんでお前まで……」

しかも口に出していないのにわかるんですかー？

「悪いかな？」

「いえ…全く…」

拓真はそれを聞くと、屋敷のインターホンを途惑いもなく押した。

……押した？

「なんで押してんだよ！」

「呼ばないと入れてもらえないじゃーん♪」

すみません。忘れていました。というかあなたたち学校どうしたんですか？　もしかしてのサボリですか？　俺はちゃんと許可取ったんで。許可取らないといろいろと終わるんで。

「熱っぽいから休んだ」

「帰って寝てろよ！　つかかなんで思ったことわかるんだよ！」

さきほどから思っているだけで、口には出していなかったのに、何故かその思っていることに返事を返してくる。

なんすか、超能力ですか？

「その通りだ。思っていることや、感じたことが目を見ればわかる」
「こえ……」

じゃあ×××なことから考えたら一瞬にして分かってしまうんすか？　拓真の目を見ずに思う。これも読まれたらそれこそ、終わりになる。

「どちら様でしょうか？」

「お嬢様の使用人から依頼を受けて来ました！　あーけーてーくーだーさーいッ！！」

「耳痛いわッ！」

隣で大声を出して屋敷に叫ぶ人がいるんだから、耳が尋常じゃないほど痛い。…のに拓真は変化無し。
なんか俺が変な人になって、る……？

「お前は普通だ」

「ココロの思いにご返答ありがとうございます」

静かに礼をして、隣の大聲を出してる人を見る。

俺は、いたって普通の人だ、よな…？

この人たちといると自分がなんだかよくわからなくなってくるのは、
気のせいだろうか？

展開（前書き）

雑です。

一日完成っすよー
ゴメンナサイorz

展開

「少々ここでお待ちくださいね」

使用人の人が言っていたがそんなことは聞かず、内装を眺める。
ヤバイ超豪華なんすけど!？ 門よりも内装がハンパないんですけど!!

「学園にもこういう部屋ぐらい2, 3個ある」

「貧乏人にはめずらしいんだよ!」

この際会話になってないこともスルーの方向で。

「これ、門と同じ紋章だ……」

瑞希が壁に書かれていた模様のなものを見てたから、連れられ見に入る。

……。瑞希の言ってることに同意できないんすけど。

「なくね?」

「誰なの! 私の時間を削る庶民は!」

煩い人が来た。今は紋章(?) 探すのに忙しいんだよ! 永遠に静かにしてろ!

「大智……この人が例のお嬢様だそうだ」

「この煩いやつがねえ……」

でも依頼は依頼。お世辞でも演技でも適当にやって、墜ちました。ってことでやればいいんだよな。うん、決定。

例のナルシストお嬢様のほうを向き、頬を染める。暑いと感じれば顔が厚くなるんだよな、うん。

「その庶民。顔が赤いわよ」

「一目惚れしました、今！ 付き合ってください！」

誰がこんなけばいくて、煩い女に一目惚れするかっての！ 付き合いたくもねえし！ 吐き気がする！

「あなたはちゃんと私の美貌が理解できるのね！」

理解できません。化粧濃いです。全て洗って来い。

イライラオーラをさり気無くだしてみてもお嬢様は気づくはずもなく、勝手に力説を始めだした。

「最近の庶民は私を見ようとせず……………いいものを見たわね、庶民！」

ここに来ていいものを見たといえば、屋敷の内装だけですが？

「大智！ あたしという彼女の存在がありながら…二股掛ける人なんて最低ッ！」

あーそういえばなんだっけ？ 瑞希が彼女役なんでしたっけ？ こんな面倒くさい設定造ったの誰だよ。二股とかかける奴は、さすが

に現在の世の中にはいないと思いまーす。

「瑞希。別れよう」

とうるか元々付き合ってません。さっさとこの馬鹿げた仕事終わらせたいんだよね……。

「ひどいッ！　ずっと大切にするって言ったじゃん！」

言ってません。そんなクサイセリフ言う気にもなりません。ゴメンナサイ。

「いいもん！　拓真と付き合うから！」

あれあれー？　拓真って柚子さんと付き合ってませんでしたっけー？　二股掛ける人最低ッ！　って言ってたけど、拓真もそうなのかもしれませんけど。

「ということで付き合ってください！」

本音を言えば付き合わないでください！

「いいわ庶民。付き合っただげるわ」

……………p a r d o n？

なんか予想外の展開になってしまったんですけどー？　こんなけはい女と付き合う気なんてないんすけどー！！

例外

「それで、あなたのご趣味は？」

「あっ……読書です」

……………。

なんでこの女の質問なんかには答えないといけないんだよ……。

「そう、私もですの。特に田中太郎様の作品がとても好ましいわ」

誰だアア！？　なにその一般的な名前の作者！（※そんな作者は実際のところ知りません。BY月夜輝石）山田花子並みの名前なんですけど。読んだこともないし、存在してたことすら知らなかったんですけど。

「はぁ……」

曖昧な返事をする。

「今日はお疲れですわね。特別にこの屋敷に泊めてさしあげますわ」
「えっ……結構です」

今日泊まってしまったら、明日の学校に行けなくなる。外出許可は今日だけだし……。

「大智泊まって来なよ。僕たちが言っとくからさ」

「えーでも授業に……」

「泊まらなないと大智の自室にゴキブリ大量に入れるよ。」

「泊まらせていただきます」

というか女が言う言葉ではないと思う、真面目に。女子は虫が嫌いと言う論があるが、瑞希は例外らしい。ちなみにいうけど、俺も例外のほうだと思う。ワーストに虫がぶっちぎりの一位に入っている。

ゴキブリなんて、名前を聞いただけで吐き気がするほど。

「哀れ、大智………」

「同情するなら一緒に泊まれよ………」

その日の夜。結局拓真は俺を裏切り帰還。なんか酷くない？

「あいつら……っ」

帰ったら瑞希の飯にトマト入れてやる……。

昔からよく言う。女は家事。男は仕事。しかしここも俺は例外なのだ。料理？ 得意分野っスよ。瑞希は料理出来るかって？ いえ

いえ全く出来ませんよ。ついこの前知ったばかりで、その人の作る料理は、食材の無駄になるだけ。というか、本当に食材を使っていたのだろうか。

暗い廊下を歩いていると泣き声が聞こえた。耳を澄ませないとわからないほど小さな泣き声。

「誰？　なんで泣いてんの？」

「大智さん……。泣いてなんかいません」

ステンドガラスの近くでお嬢様が泣いていた。

例外（後書き）

や、やっと2つ目☆

このペースで行ったらこの話いつ終わるんでしょうね。・ω・。（

涙

なんで泣いているのかわからなかった。

涙を流すことで何か変わるのか。

泣くことに意味はあるのか。

この人が何を考えているのかわからない。なんて声を掛けていいかなんて全くわからない。

「昔の事、思い出したんですの」

「むかし？」

わからない。更に彼女がわからない。昔の事をわざわざ掘り返して、何故泣く必要がある。昔は昔。過去は過去。もう変えることは叶わないことを、なぜ思い出す？

「私、一つ上に姉がいるんですの。私と違って勉学も出来て、運動も出来て、すばらしい人なんです」

それがどうした。

姉が出来がよくて、自分が出来損ないであることが悲しいのか。

「父と母はそんな姉ばかり見て、私を見てはくれない。それに、メイドも執事も皆姉ばかり見て、私を見向きもしない……」

「……理解できないな」

涙の跡を頬に残して言葉を失ったようにこちらを見る。

「見てもらえないなら、努力すればいい。出来損ないなら他のものをやってみればいい」

見てもらえない分頑張ればいい。ただそれだけのこと。この人は何もしていないだけ。だから見てもらえないんだ。

ただ見て欲しいだけなのに、な……。

「多分さ、姉も頑張ってるんだって。認めてもらえるように、存在を否定しないで欲しいようにさ」

自分も同じだった。勉強なんてろくに出来なくて、運動神経なんて極々一般。唯一できたのは他人になりきることに。細かいものや、作り物を作ることに。

それだけで十分だった。

「あんたはさ、自分を見てくれる人だけ信じればいいんだよ」

きっと本当の自分を見てくれる人がいるから。俺じゃなくて、他の人を信じてください。

箱庭

箱庭から一步、踏み出したら、

そこは

……

……

「大智さん少しよろしいですか」
「……少しならいい、です」

昨日のことが頭を過る。確かお嬢様にめっちゃくちゃなことタメ語使ったうえに、はちゃめちゃなこと話した気がする。

「私、明日ここから出ようと思います。ちゃんと自分で自分を見つけてくれる方を探したいですの」

ゆっくり、時間をかけて考えだしたのだろう。目の下に隈がうつすら出来ている。

「今回はありがとうございました。きつと言われなかったら、毎晩泣いていたかもしれません」

きっかけは小さなもので、こんなにも近くにあるものだった。自分はこの人の希望になれただろうか。

「それと、彼女さんを大切にしてくださいね。付き合う話は白紙に戻しますから」

それだけ言うと笑みを浮かべてどこかに消えていった。自由人だな……。

その姿を見届けると屋敷を後にする。初依頼は成功なのか？

「お帰りー」

「あれあれー今学校の時間じゃなかったかなー？」

なんで帰ってきたときに迎えられないとまらない。しかも今学校にいたと思われる瑞希に。

「いやー今体育だからさ。嫌いなんだよね、体育って」

「その割には運動神経よかった気がするんすけど」

運動せずに運動神経がいいとは何事だ！　チクシヨウ、敵わねえし。

「お嬢様なんだって？」

「あの家出るらしい。“自分のことを見てくれる人”を自分で探すらしい」

あの後俺と途中まで駅まで行き、遠いところにお嬢様は行った。もちろん一人で。何故かその時は連絡すると連絡先を無理やり交換された。いいっすか、無理やりっすよ。む・り・や・り。

「見つかるといいんじゃない？」

箱庭の先

広すぎる世界

それは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866j/>

悪魔のゲーム

2011年10月6日14時14分発行